

「なにも なかっただよ」

青髪耳長のお姫様
衆人環視全穴レイプCG集

基本絵13枚
差分200枚前後

価格700円(税別)



闘神都市で開かれる闘技会、闘神大会。

武術大会としては世界最大の規模であるその大会で優勝すれば、地位、名誉ある称号、破格の賞金…戦士が望むもの全てが手に入るため、世界じゅうから名のある闘技者が集まってくる。

他の大会にはない二つのルールが特徴だ。

一つ目。


出場者は必ず美女のパートナーを決め、共にエントリーしなければいけない。ただし、出場する闘技者が美女の場合に限り、パートナーを自らが兼ねることが許される。

そして二つ目。

勝利者は敗北者のパートナーを24時間の間、自由にして良い。

「美女」と定められたルールを鑑みれば何をされるかは明らかだ。

敗者の女を好き放題凌辱して良い、という事だ。



その日、闘技場は異様な熱気に包まれていた。圧倒的な実力を持ち、優勝は確実と思われていた一人の少年が対戦相手の卑怯な毒攻撃の前にまさかの敗北を喫した。だが異様な観客の興奮はその勝負自体によるものではない。

彼のパートナーだ。

少年のパートナーは腹違いの姉でもある、リセットという名前の青髪の少女。

赤いクリスタルが陽光にきらめく。処女の証である、赤いクリスタルを額に持つ、身長125センチの小さいレディだ。

誰をも惹き付ける無邪気な愛くるしさど
小さい体に不似合いなほどの聡明さで
外交官をもこなしており、

○女そのもの、といった体格も相まって
熱狂的なファンが多数存在する、
リセット・カラーという名前の少女。

彼女がこれから――

犯されるのだ。



「おいしー！よわっちい弟は完全にのびてるみてえだな！」
この上ない喜びに満ちた声で魔物隊長、ブロピオが哄笑する。

「……エールちゃん、あんなに酷いケガ……お願い、早く助けてあげて！」

救護員に懇願するリセット。

「おいおい、人の心配してる場合かよ？
これからお前がどんな目に遭うと思ってるんだあ？」

どんな目、と言われても……
正直なところ、
こんな状況でもリセットはまだ
はつきり自分の危機を
認識していなかった。

処女であることはもちろん、
ナイスバディの対極に位置する
無発達かつ低身長な矮躯のために、
今まで一部の特殊性癖の持ち主以外に、
性的な目で見られたことはないために、
自分が性的なことをされる様が
想像できないのだろう。

うおおお……

観客席に低く重いどよめきが広がる。
プロビオが鎧の股間パーツを外し、
いきり立ったペニスを
衆目に晒したのだ。

リセットはそれを見て息を飲んだ。
自分の腕より太く、血管が浮き出た
硬く勃起したその凶器。

捕食者に睨まれた小動物のように、
体が固まり動くことができない。

「許してほしいかあ？リセットちゃんよ。」

「う、うう……」

「普通ならこんな小さい子に
ここまでデカイのは入れようとすら思わねえ」

「だがこれは闘神大会、

敗者のパートナーは勝者の好きにしているのが決まりだ！」


プロピオはナイフで手早くスカートの前部分を切り取り、可愛らしいドロワーズを露わにすると、観客席に大声で呼びかける。

「お前らももちろんそれでいいよな！」

津波のような拍手と歓声が沸きあがる。

欲望を正当化できる拠り所があれば、人は良心など簡単に忘れてしまうものだ。客席を埋め尽くす観衆のほぼ全員が「ルールだから」という言葉で己の下劣さから目を反らし、プロピオを熱烈に支持していた。

誰もが優しさを心に必ず持っているかと固く信じているリセットにとって、下着姿を晒される恥ずかしさよりも観衆の残忍さこそが深く心を傷つけた。



いやらしい笑みを浮かべながら
プロビオがリセットの体を強く押さえつけ、
反対の手が彼女のズロワースに伸びる。

「さあ野郎ども！ご開帳の時間だぜ！」
そう高らかに宣言すると、
彼は少女の下着を
一気にずりおろした。

大観衆がいつせいに生唾を飲む。

女性の好みの守備範囲というものがどうでもあつらふと、真に美しいものはそれにはるかに優先する。

リセットの股間のやわ餅のような割れ目は、もちろん毛の一本もなく。その手の趣味がない者でもひと目で発情させる魅力にあふれていた。

無力なこの小さい美少女を守りたい……

それを何十倍も上回る

「犯したい」という気持ち。

全員の心は一つになっていた。

体当たりのような勢いで、魔物隊長はカラーの少女を
地面に突き倒す。

勢いで足が開いてしまい、
無毛の股間があらわになる。

羞恥のあまりに
閉じようとするが、
すぐに魔物隊長が足首をつかみ
それを阻んだ。



「へへへ、リセットちゃんよお……
このときを待ってたぜえ。」

グロテスクな性器の先端を
リセットの顔に向けて脅すようにしながら、
プロピオはニヤニヤと笑う。

負ければこうなるとわかってはいたが、
まさか実力ではるかに勝るはずの
自分のペアが、敗北するなどは
夢にも思わなかった。

カラーの少女は
珍しいほどの小さい身長に似合った
平らかな胸を上下させて荒い息をつき、
逃れられない凌辱を、
ただ待つことしかできない。



「確かその額のクリスタルってのは
処女を失うと青くなるっていうな？」

「う、うう……」

「嬉しいねえ、俺が最初の男ってわけだ。
観衆の皆さんにも見せてもらおうぜ、
リセットちゃんのだ処女喪失ショーをよ！」

固く唇を噛み、目をふせるリセット。
その長い睫毛には宝石のような涙が光っている。



つぶ……

「ううう……っ……」

プロビオの亀頭がリセットの大陰唇と小陰唇を
掻き分けながら侵入を開始した。

「いいねえ、その反応……これから
ぐっちよぐっちよにされちゃうってのが
わかるだろ？」

（誰か……お願い、助けて……!）

心の中で悲鳴を上げるリセット。
緊張と恐怖で全く声がでないのだ。

あと数センチプロビオが腰を進めるだけで、
自分は……汚されてしまう……

みちみちみちみちっ………!!

「ふぐうううっ!!!」
悲鳴を上げてのけぞるリセット。
体の奥で何かがはじけるような感覚と
激しい痛みがあった。

観客達が大いに盛り上がる。

プロピオは含み笑いをもらった。

スウツ……と色が変わるクリスタル。

リセットは処女を散らされたのだ。



「やすんでんじやねえぞおらあっー!」

「いぎやああっ!!」

プロビオが入る限界までペニスをねじ込む。

「う、うう………いたいよお………」

リセットの大陰唇は裂けそうなほどに左右に伸びながらも、しっかりと凌辱者のペニスをくわえ込んでいる。

プロビオはさらに体重をかけて鋼鉄のような肉柱を自分の半分にも満たない体重の小さい少女にねじ込んでいく。



ピク、ピク……とりセットが
長い耳を震わせて痙攣している。

子宮のすぐ下、

膣の一番奥にまで
プロピオの破壊槌のようなペニスは
挿入され、やっとなり止まった。

「これでお前は女になったわけだ、
でもこれからが楽しいぜ？」

「あ、ああ……かはあつ……」
リセットは目を白黒させながら、
呼吸するだけで精一杯だ。



「う、うう……」
「ほう、思ったより泣かねえなあ」

リセットは健気にも
悲鳴を必死でこらえ、
凌辱に耐えようとしていた。

それでは凌辱側は面白くない。
こういう「優しい子」「いい子」が
悲鳴をあげる様、
心が壊れていく様子を見る事が
プロピオにとっての
至上の喜びだからだ。



相当なショックを受けているのは
勿論伝わってくるが、
リセットの精神はまだ
崩壊というほどダメージを受けていない。

プロビオは
一切手加減しないことにした。

「そうやって可愛くない態度取っていると
どうなるか教えてやるよ」



「んっ……んあああっ……!!」

リセットの悲鳴が上がる。

プロビオがその巨体で
上から全体重をかけてのしかかったのだ。

腔の奥をずんずんと押され、
重みで呼吸すらままならない。

「さてと、本気でらくぜ」

鎧や装備品の重さまでもを加えた
魔物の全力でのピストンが始まった。

歓声がかき消えるほどの
重さ、苦しき、股間に感じる
痛みと熱さ。

リセットが必死で押し返そうとしても
体力と体格の差が圧倒的過ぎて
まるで抵抗できない。



「ひ、ひい……うあああつ……！」

泣きじゃくりはじめるリセット。

その哀れな姿とくしゃくしゃの泣き顔に、
さらに嗜虐心を刺激され、
プロビオは一層ピストン運動に
力をこめる。

ズン！ズン！と鈍器で
思い切り体内を殴られるような
物凄い衝撃がカラーの少女を
苦しめ続ける。

「う、うおおお……射精るっ……!!」

「え……、待って、待ってえ……!」

「処女だった膣内につ……
射精してやるからなっ……!」

「受け取れよおおツ!!」

涙を浮かべながら、
必死でもがくりセツトに、
とどめの一撃のような
ひととき強い突きこみが食らわされる。

「いやだああああっ!!」

「おらああああっ！」

「やっ……!!!」

リセットの下腹部、膣の一番奥で、
プロビオの精液がほとばしる。

粘性が高く熱いそれは、
薄桃色のヒダの奥まで、
しっかりとしみこんでいく。

「う、うおっ、射精る、まだ射精るぜっ……!」

「や、やだっ、いやっ、やだあ……!」

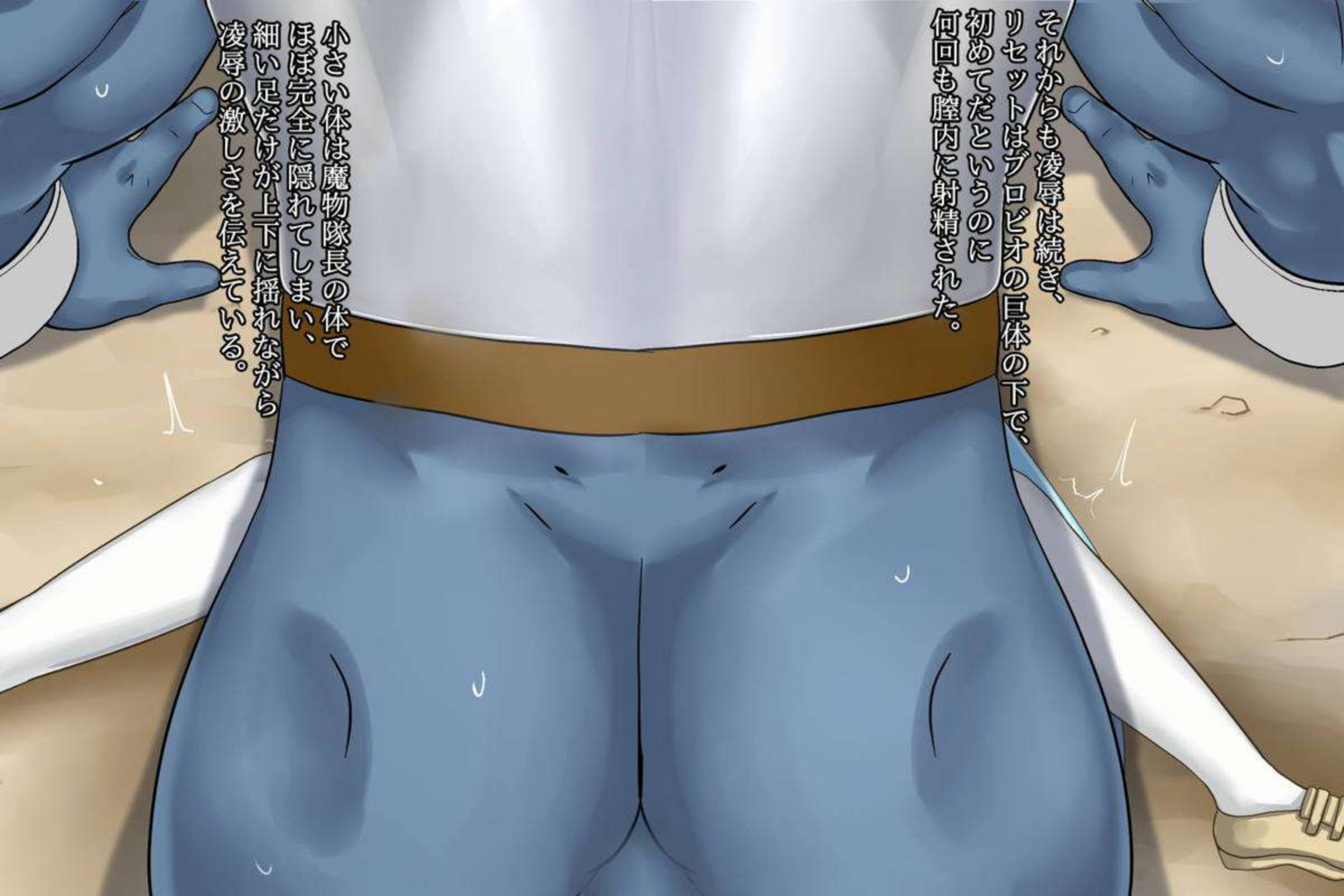


無遠慮なその精液は
子宮の中にもまで、
そこを埋め尽くさんほどの勢いで
流れ込んで来ているようだった。

「どうだっ、魔物のザーメンでっ、
腹がいっぱいな気持ちはよおっ」

「くくるっ……ふっ…」





それからも凌辱は続き、
リセットはプロビオの巨体の下で、
初めてだというのに
何回も膣内に射精された。

小さい体は魔物隊長の体で
ほぼ完全に隠れてしまい、
細い足だけが上下に揺れながら
凌辱の激しさを伝えている。

プロビオの体が離れると、
無惨な姿のリセットがそこだった。
何回犯されたのだろうか、
つややかな下腹部は
妊娠したかのように
若干膨らんでおり、

開きっぱなしになった
膣口からは、
とめどなく精液が
逆流し続ける。



「ふうっつ、いい悲鳴と締めりだったぜ、
リセットちゃん」

引き抜いたペニスを振り、
残滓をリセットの顔にかけながら、
プロピオは上機嫌だ。

「あ……うえ、え……」

リセットはただしゃくりあげながら
泣くこと以外に
何もできなかつた。



「おら、しゃぶれよ」

リセットの衣服を強引に脱がし、
コロセウムを埋め尽くす観衆の前で
完全に素っ裸にすると、

プロピオはリセットに
自分のペニスへの
口での奉仕を要求した。

ショックで焦点も合わないような
有様のリセット。



「お前の処女をぶち抜いた
立派なチンポだぜ？
ちゃんと綺麗にしろっての」

「う、うう……」

リセットは何も言わずに
ただかぶりを振る。

衆人環視レイプによる
処女喪失が
よほど堪えたのか、
物も言えないような状態だ。



「じゃあそこに伸びてるポウズを
殺すぜ」

「……！」

リセットの震えが止まった。

自分がこれ以上ひどいことをされるのは
勿論恐ろしい。

だが、大切な家族に危害が及ぶのは
お姉さんとして子供のころから
弟を見ていた心優しい
彼女にとって、さらに恐ろしいことだった。



「んく、んっ……」

リセットがその小さい口で
亀頭を一生懸命頬張る。

年齢的には年頃の少女とはいえ、
その体型もあいまって、
完全に犯罪そのものの光景だ。

だが会場の空気も
プロピオの狂気のような性欲も
まったく冷えることはなく、

稚拙な初フェラにますます
その興奮、熱が上がっていく。



「射精るっ……飲めよっ！」

「う、んんんっ……！」

カラーの少女の喉の奥に、
粘つく汚液が塊で流れ込む。

思わず反射で吐いてしまいそうに
なるのを必死でこらえ、
異様な味の精液を
どうにか飲み下そうと必死になる姿は、
プロビオのような残忍な男にとって
とても見えていて気分が良いものだ。



「うまいか？俺のザーメンは？
最後にちよっと口の中に入れておけよ？」

無言でうなずきながら、
リセットはプロビオのザーメンを
飲み下し続ける。

最後の分は口にとどめて
おかなければいけないらしいが、
いつ射精が終わるのか
わからないほどの量が
長大なペニスを通して
喉に送り込まれる。



「ほーらアーンしるアーン」

「ひゃら……」

リセットは促されるままに口を開ける。
そこには凌辱の証といった体で、
相当な量の精液が
溜められている。

「いいか動くんじやねえぞ」
リセットを座らせたままで、
プロピオは自分で
ペニスを扱き始める。



「うおおっ……—」

リセットの可愛い顔と口の中に、
新鮮な魔物の精液が
かけられる。

「は、はあ、はあ……—」
荒い息をするリセット。
プロピオは
まだまだ凌辱に満足していない。



「はあ……はあ……」

「お前本当にかわいいなありセット……」

プロピオはリセットの矮躯を
再び砂地に押し倒す。

足を広げさせられたその小柄な肢体は、
胸こそほぼ膨らんではいないが、
桃色の花弁のような乳首が美しく、
滑らかな腹や瑞々しい太ももなど、
全てが美しい。

プロピオは興奮を抑えることができず、リセットに再びのしかかるプロピオ。

苦痛と酸欠で朦朧としていたリセットの意識が突然はつきりする。

プロピオが強引にキスをしたのだ。

処女だったリセットにとって、かなりの衝撃だった。もちろんだれとも接吻を交わしたことなくなどあるはずもない。



(わたしの……ファーストキス……)

本来恋人とする行為を

魔物隊長に無惨に蹂躪され、

悲しみに打ちひしがれるリセット。

その可愛らしい心の痛みに

プロピオはより一層興奮する。



「ひゃっ……！」

リセットはくすぐったさと不快さが入り混じった感触に身をすくめる。

プロピオが乳首を吸い始めたのだ。
リセットはあまりのことに
心の中でさえ、何を考えていいかわからない。

「やめ……てえ……」



「うう……舐めないでえ……」

胸全体が唾液まみれになるほど、
プロピオはリセットの乳首といわず
あるかないかの乳房といわず
舐めまくる。

その感覚に
少しずつつ体が反応してしまうのは
犯されて子を産むことの多い
カラーの性というものか。



「ふー、ふー……」

涙を流して息を整えるリセット。
だが今のキスと乳首舐りで興奮した
プロピオのペニスが、
再びその割れ目に
あてがわれる。

「うっ……もう……許して……」



めりめり、と秘肉を割って
プロビオのペニスが入る。

足を広げ、胸をさらし、
結合部は観客から丸見えだ。

(早く……終わって……)

「……っ!!」

リセットは目を見開いた。

プロビオが思い切りめり込ませた
ペニス、外からは
はつきりわかるほどに
内側から腹を突き上げている。

(こんなにされたら、息がっ……
できないっ……)

その状態でガスガスとしばらくピストン運動をすると、
プロビオは咆哮を上げた。

「……リセット……」

「……また、中……」

泡立つ精液がリセットの腹の中に
呑み込まれていく。
痙攣しながら、それを受け入れるリセット。



腔内に射精されたプロピオの
精液は、ペニス自体が
太すぎるがゆえに、
結合部からなかなか出て行く
ことが出来ず、
結果リセットの子宮内へと
流れ込んでくる。

射精の熱さを子宮で味わわれ、
リセットはただ泣きじやくった。

膣はおるか
子宮内までもが精液で汚され、
可憐な乙女はその顔に恐怖を浮かべて、
闘技場を這いずって逃げる。

「ひ、ひらっ……いやああっ……」

「ひゃひゃひゃっ、最高だぜ、
お前みたいない子ちゃんか
マ○コにぶちこまれて
泣きながら逃げるさまはよっ！」



「でももっといいのは
逃げてる最中に追いつかれて
絶望しちゃう時の顔だなあ」

足腰に力が入らない
凌辱された少女がどれだけ追いつくても、
魔物隊長から逃げおおせるわけがない。

横に膝立ちになり、未だに硬度を
全く失わない巨根を、リセットに
見せ付けるプロピオ。
「ひゃひゃひゃっ、最高だぜ、
お前みたいない子ちゃんか
マ○コにぶちこまれて
泣きながら逃げるさまはよっ！」



ちゅく、という音を立てて、
鈴口と割れ目が接する。

軽く尻を押さえられるだけで、
力ない抵抗は封じられ、
逃げることは不可能だ。

「やめて、もう、やめてくださる……
お願いしますっ……」

「だめだ」

「いやああああっ……！」

ずぶずぶと無慈悲に
処女を失ったばかりのリセットの生殖器と
極大サイズのペニスがねじ込まれていく。



「ゆるして、ゆるしてええっ……！」

「24時間は勝者の好き放題だって
忘れたのかよ!?

まだまだこれからだぜっ!」

「あああ……」

絶望の叫びを上げるリセットの尻肉に
プロビオがパンパンと腰を打ち付ける音が
闘技場じゅうに響き渡る。



「ああ……ららららリセット、お前のマ○ロ……」
「おねがら、もう、もうやめて……」

消え入りそうな声での哀願は、やはり
プロピオにとっては性欲を燃え上がらせる
興奮材料にしかならなかった。

「やめてやるよ、俺が満足したらなっ!!」

ものすごいスピードで
射精へと向かい始めるプロピオ。
額を砂地にぶつけながら
リセットはなおも犯され続ける。



ぶびゅっ、ぶびゅうう……っ……っ……
射精。
結合部からあふれ出る精液と、
リセット自身の愛液。

あまりにも犯されすぎたせいか、
リセットは性行自体の
痛みはほぼ感じなくなっている。

そして快楽と呼べるものが
少しずつ彼女の肉体を
侵食していつているのがわかる。

だが、こんな相手に快楽を
与えられてるなどとは
どうしても認めたくない。



繋がったままその場だへたりこむリセット。

もう限界だ。
だが、この男は
リセットが哀願しようが
気絶しようが決して
凌辱の手を
ゆるめないだろう。



地面に投げ捨ててあった
リセットの服で、
その持ち主の汚された股間を
無造作に拭くプロビオ。

とりあえずそれなりに
綺麗になった割れ目。

敏感になっている部分への刺激で
痙攣しているリセットだが、
もう凌辱が終わったのかと思い、
後ろをちらりと見てみたが、

プロビオは何かをしようとしているようだ。

魔物隊長はリセットの大陰唇をくばあ、と左右に割り拵げた。鮮やかな薄桃色の可愛らしい性器が、陽光の下にむき出しになる。

観衆へよく見えるようにプロピオは自分の体を横にどけ、リセットの秘所を衆目に晒した。

大歓声が上がリ、プロピオの名前を呼ぶコールまで起こり始める。

「や、やめてえ、みせないでええっ……!!」

「今からがいいところだからよ、待ってる」

「え……?」

ぶびゅぶこぶぶ……
「いやあああああつ！」
プロピオがぶち込んだ精液が
リセットの腹圧に押されて逆流し、
綺麗な小陰唇を再び汚した。

これ以上ないほどの屈辱に
リセットの目の前が真っ暗になる。



にゆるるっ……!!

「ひいいいっ!!!」

今度は後ろの穴に、
プロピオが逆流した精液を
掬い取って指で塗りこんでいる。

「ローションじゃ風情が
ねえからな、お前の愛液と
俺のザーメンで入りやすく
してやるよ」

「入るって……まさか……!」

「そう、ケツの穴に

こいつをぶちこむのさ」

「いやあ……っ!!

嫌だあ……っ!!!」

リセットが子供のよう
に泣きじゃくり、

残された体力をフルに
使って抵抗し始める。

だが強姦自体の

経験が非常に豊富な

プロピオは全く動じず、

慣れた手つきでリセットの

小さい背中を

思い切り拳でぶん殴る。

呼吸が一瞬とまり、
身を丸めて苦しがる
リセットの腰を
しっかりと固定し

ずぬるっ……!!

「かはっ……!!」
リセットのアヌスに、
彼女の腕より太いペニスが
根元近くまで挿入された。

「グハハ、気持ちいいだろ？
お前みたいに小さい女は
前より後ろのほうが
楽に入るもんなのさ、
こういう風になっ!!」

「う、うああああ……」

ばん、ばんっという音を立てて
ガッツリピストン運動を始める
プロピオ。
尻の穴で彼と繋がっている
カラーの少女は
死んだように動かない。
だがその頬は屈辱に
真っ赤に染まり、
歯は固く
食いしばられている。

「おいおいなんだあ
この締め付けはよお！
初めてのケツで感じてるとか
ありえねえだろ！！」

「これでお前の穴は
全部俺が処女を
もらったわけだな！
ぎやはははは！！」

ピストン運動が加速し、
リセットはプロピオに
しっかりと抱え上げられるようにして
尻を犯され、

膝が折浮くほどに
激しく前後に体を揺らされる。

観客も乙女への
凌辱のとどめとも言える
アナルレイプに大盛り上がりだ。

ぼびゆる、ぶびゆる……という感触とともに、
リセットの腸内にまでプロビオの精液が
たっぷりと流し込まれた。

「おらあっ!!喰らえっ!!ザーメン注入だぜっ!!!」
「ひっ、かはっ、は……!!!」



「ほら愛情こめて奉仕しねえか、
全部の初めてを奪った男の
チンポだぜ？」

「は、はい、がんばります……」

仰向けにごろりと寝たプロピオの
巨大なペニスを、リセットは
チロチロと舐めて綺麗にしている。



(ひどい臭い……でも
もうどうせ私……)

屈辱と暴虐の嵐に、
少女の心はへし折れん
ばかりに傷つき、
ある意味自虐的な
心境になってすらいた。

(ひどい臭い……でも
もうどうせ私……)

屈辱と暴虐の嵐に、
少女の心はへし折れん
ばかりに傷つき、
ある意味自虐的な
心境になってすらいた。

(私だって汚くなっちゃったし……
ちようにどいいのかも……)



「よーしよしいい子だ、
それじゃ最後に手で出してくれっか？
頑張ってしごいてよ」

リセットはうなずくと、唾液で
たっぷりぬらしたペニスを、
滑らかな両手で扱きあげ始めた。



「おー気持ちいい、そろそろ出そうだぜ……」

先走り液の味がする。
リセットは鈴口から滲み出るそれを
少しずつ飲み下しながら、
手の動きを速めていった。



「射精るっ……！リセットおおっっ！」

口のなかに凄い勢いで拡がる
黄ばんだ粘液を、
リセットは吸い上げるようにして
飲み干し続ける。

鼻の奥に入ったりもしたが、
どうにかこぼさず上手に飲み込めた。



ブロビオはそんな彼女を見て
似合わぬ爽やかな笑顔を見せると
こう言った。

「よし、それじゃ俺は大体満足したぜ。
嬉しいか？」

力なくうなずくりセット。
永遠かと思われた凌辱が
これで完了なら、ずっと終わらないよりは
嬉しいと言えなくもない。

「でもな、あと20時間は俺の自由にしていいわけだ」

「え…………？」

「お前と俺の愛し合ってる所を見せつけられてよ、
観客さんがかわいそうだからな。」

「そんな…………」

「観客席のヤロウ共！この女を
好きにしていぞ！参加したいやつは
全員参加しろ！」

割れんばかりの歓声と、
雪崩うって出てくる飢えたオスの群れ。

リセットはその場から一步も動けず、
レイパー集団に飲み込まれていった。

リセットはその場ですぐ押し倒され、
その未成熟な体を間近で
何十人も男に視姦される。

首にペット用の首輪をはめられ、
両手両足を押さえつけられ、
大の字に転がされる。



男達が服を脱ぎ始め、
リセットの周りを取り囲んだまま
一斉に勃起したペニスを
見せ付けた。

「あ、あああ……」

怯えきつたりリセットの反応は
凌辱の気分を
この上なく盛り上げる。



「よし俺が最初だ！
リセットちゃん初めての
人間の男になるぜ！」

男が無造作に柔らかい秘肉に
逸物をねじ込む。

「い、嫌ああ……」

準備万端のそれはしつとりと
男のペニスを包み込み、
体格相応のきつさで締め上げる。



「射精るっ……!」

「はぐううっ!」

リセットの小さくきつい膣に、
男の精液がぶちまけられる。

「あ〜〜気持ちいい…
こんな小さい美少女に申出しとか
最高すぎる…」

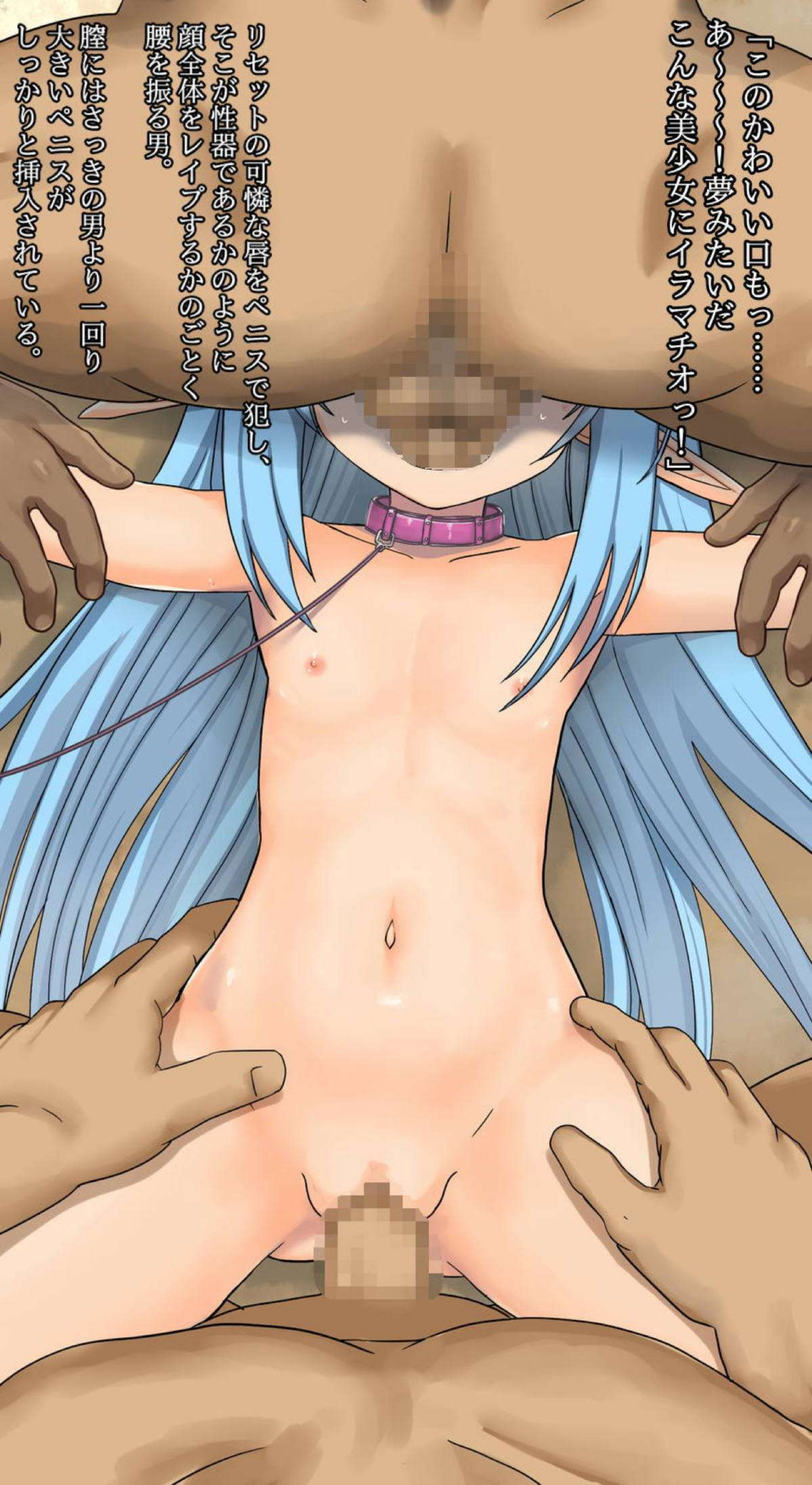
凌辱完遂の達成感に酔っている男を
おしのけ、すぐ他の男がのしかかる。



「このかわいい口もっ……
あ~~~~! 夢みたいだ
こんな美少女にイラマチオっ!」

リセットの可憐な唇をペニスで犯し、
そこが性器であるかのように
顔全体をレイプするかのごとく
腰を振る男。

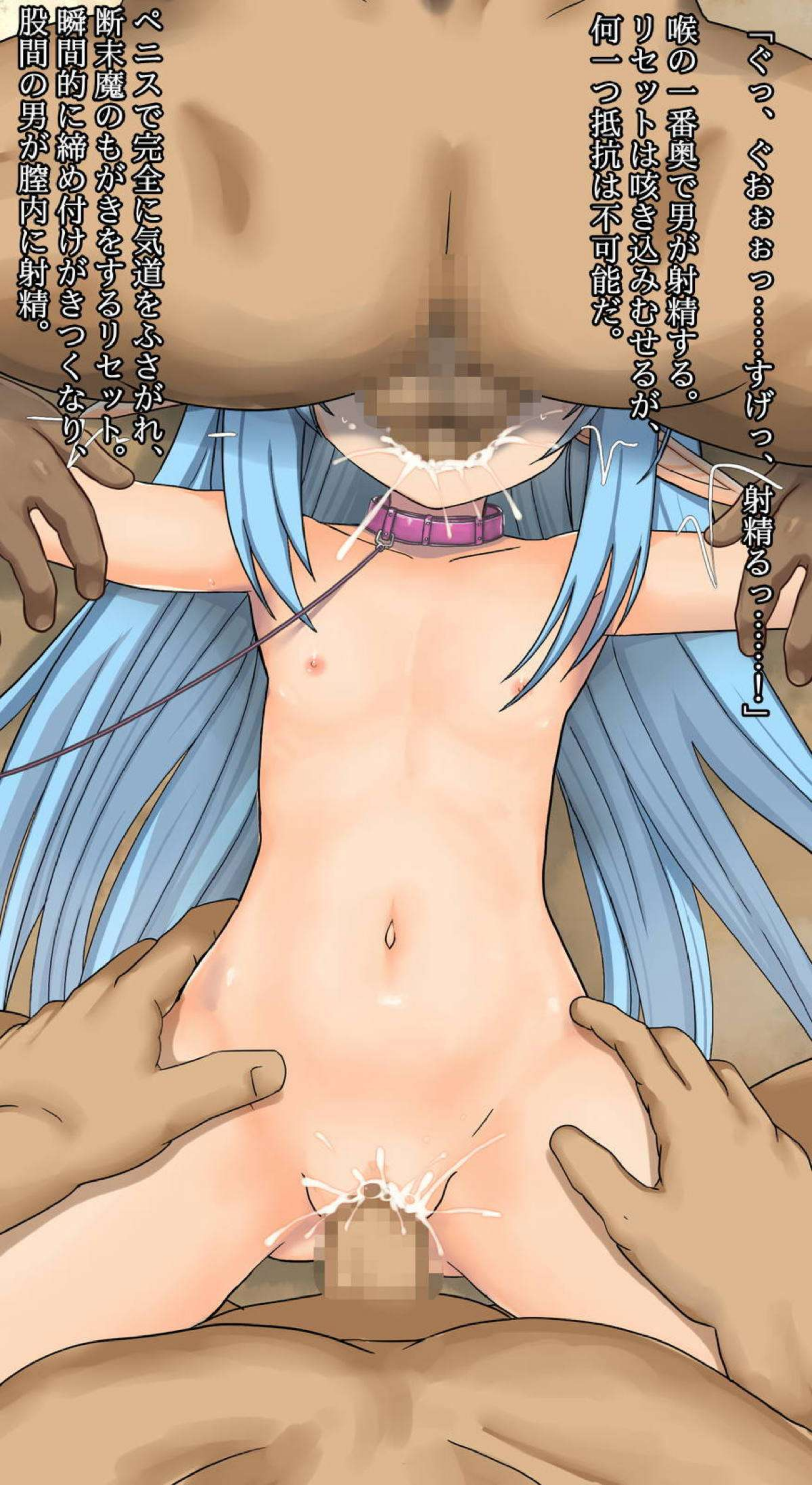
膣にはさっさきの男より一回り
大きいペニスが
しっかりと挿入されている。



「ぐっ、ぐおおおっ……すげっ、射精るっ……！」

喉の一番奥で男が射精する。
リセットは咳き込みむせるが、
何一つ抵抗は不可能だ。

ペニスで完全に気道をふさがれ、
断末魔のものがきをするリセット。
瞬間的に締め付けがきつくなり、
股間の男が膣内に射精。



鼻といわず口といわず、
濃厚すぎる精液で覆われたリセット。

だが顔を手で拭うことも出来ない。
一生懸命口にたまった精液を飲み込んで、
どうにか呼吸を再開する。



「あ〜もうガマンできない、
全員でぶっかけようぜ！まだ20時間もあるし
何回もできるって！」

「それもそうだな！いくぞ〜っ！」

涙目のカラーの少女の頭上で、
何人もの男が勃起したペニスを
しごきます。



「お、お願い、もうゆるして……私、死んじゃう……」

「大丈夫だって、かけるだけだから！その後犯すけど！」

「その顔そそるねえ！」

「あー出そうっー！」

リセットの目は暗い。彼女の心のささえである人への無条件の信頼。

それがどれほど浅はかかつ危険なものだったか、今この瞬間にも全身に刻み込まれ続けているのだから当然だろう。

「う、うおおおつ……、
リセット、リセットおおつ!!」

男達が一斉にザーメンのシャワーを、
カラーの少女に浴びせる。

熱く臭い滴りが
彼女の体に絶え間なく降り注ぐ。



何十回かその姿勢のまままで犯されたただらうか。
顔といわず体といわず、かけられた精液が
層を形作るほどになり、

かわいらしい股間からは
精液が1リットルほどもあふれ、
地面に大きい水溜りを作っている。
「あ……うあ……」



カラーなのか何なのか
よく判別できないほど
精液で汚れた少女を
一旦水洗いし、
丁度いい高さの
木箱に乗せて凌辱する。

そのまま地面に這わせると
低すぎて腰が振りづらいからだ。

「カ、カラーのマ○コ、すっげえ……」

「飲めよ……っ！」

リセットが口と膣から、
大量の精液を飲み込まされる。
涙を浮かべた目はどこか視線があいまいで、
虚ろな表情だ。



「あゝかわいい、
本当にかわいいよりセツトちゃん……
綺麗な心で俺のチンポ
ナメナメしてくれてる……」

「うらやましくもないぜ、なんたって
俺はこのコの中に出してんだからな」

軽口を叩きながらも
男達の陵辱は壮絶なものだ。
全身を使ってリセットは
むらがるオス達に奉仕している。

髪をつかんで引きずられ、
強引に尻を押し開かれる。
何をされるのか察したりセツトは
ほとんど聞こえないかすれた声で

「やめて」「たすけて」と繰り返す。

男達は止まらない。
この小さい尻とマ○コを今から
同時に犯すのだ。

「あうううう……」
太い肉棒が二本もリセットに侵入する。
頭を振りながら異物感に
必死で耐えるリセット。

小さく柔らかい手で
肉棒を扱かされもしている。



「あ~~~~!めっちゃ気持ちいい…
こんなかわいくて小さい子と
全力でセックスできるなんて
二度とないもんな…最高すぎるぜっ!」

「前と後ろが中で刺激しあって
気持ちいいでしょ?リセットちゃん!!」

「は…はぐらっ…!」



「射精るっ!!!」
「うあああっ!!!」

こっ तरीとした精液が、
リセットの小さい体に収まりきれず
すぐに出てくる。



「あう、あっ……あっ……」
リセットは体の痙攣がおさまらない。
がくがく、と射精に合わせて震えている。

「あ、イッてる、
リセットちゃんイッてるよ！」
「よーしもっともっと
犯すぞ〜〜!!!」
男達のテンションは
上がる一方だ。



まるで獲物に大量にたかる虫か何かのように、
外からリセットがまるで見えなほほど
男達が彼女の小さい体を覆い尽くしている。

その中では徹底的な凌辱が行われている。

「耳っ、リセットちゃんの耳きもちいいよおっ！」

「ヒザの裏もすべすべして滑らかで、最高だああっ！」

「足の裏もぶたぶたで小さくてかわいいっ！」

リセットの体中を性具として使い、犯しながら、
男達がうごめき続ける様は、まるで床も壁も天井も
全てが生きた肉でできた部屋のようにだ。



「お、おねがい、もう、わたし、らめええっ……」
「そんな事言わないで、もっともっと気持ちよくなっってよ
リセットちゃんっ……！」

もちろんリセットからすれば
気持ちいいとかそういう次元の問題ではない。
もう凌辱が始まってから十時間を超えている。

(し、死んじゃう……)

「ん、んむっ……むがあっ……、
んん——っ!!!」
男達は空いている口と、プロビオによって
広げられた前の穴に、
二本同時にペニスをねじ込んだ。

これでカラーの少女は全ての肉穴を
塞がれたことになる。

「んっ、んおっ、んんんんっ!!!」

肉棒に体内を埋め尽くされて悲鳴を上げるリセット。
その哀れな痴態からつい半日ほど前の可憐で清純な姿を
思い浮かべることが難しい。

両足と両膝の裏、肛門、両手、耳、頭、膣と口……
12人も男がカラーの少女一人と
同時セックスをしているのだ。

もはや大量の性刺激を処理しきれない体じゅうの神経に、
焼き切れんばかりの負担がかかっている。

「い、いきぞうっ……リセットちゃんのおくちだっ……!」

「うおおっ……膣内に、膣内にだすぞおおっ!」

「せ、せつめえ……すげえしめつけるううっ!」

男達はリセットの全身に突き立てこすりつけているペニスの動きをいっせいに加速させる。

熱さと硬さを増していくそれが、リセットを強制的に快樂の地獄へと追い詰めていく。

「ん、んおおおっ!! ああああ——っ!!!!」
どぼっ、どばあ……っ!!

おぞましいほどの量のマグマのように熱い粘液が、
リセットの体の中と外を汚しつくした。
男達が離れるとすぐまた順番待ちの連中が
似たような体勢でリセットを犯し始める。

リセットは完全に気絶しても、意識の無い少女を輪姦する新たな楽しみを見出した男達の玩具にされた。

「あれ？リセットちゃん息してなくない……？」

「困ったな、おい、しっかりしてよりセットちゃん」

600回以上の射精を受けて、疲労と苦痛と心へのひどい負荷で、リセットは瀕死の状態にあった。

「俺が活入れてやるよ」


処女を奪った魔物隊長が、妊婦のように膨らんだリセットの腹を思い切り踏みつけた。

「がはああっ……!!」

精液を噴水のように体中から噴出し、リセットはそのショックで蘇生した。

「ああ……いい悲鳴だぜ……」

うっとりとして魔物隊長は少女の苦悶の声に聞き入る。



「24時間まであと14時間くらいあるからよ、せいぜいがんばれよ?」

「い、いや……いやらあ……」

リセットは最早首を振る力もない。
その精液でまみれた可憐な唇に、
今日何百本目かわからないペニスが、
ゆっくりと挿入されてきた。



ケイブリス、魔人の中で最強を誇る
異形の魔獣。暴虐を好み性欲の強い彼は
いつも通り人間のメスをさらってこさせては
犯していた。

だが今回は珍しい獲物がかかった。
やたら小さいカラーの美少女、
それも処女だ。


「おー、カラーじやねえか、前から
犯ってみたかったんだよな」

ケイブリスはその自在に動く触手型の性器で、
リセットの体を器用にいじくりまわす。

「あ……」
つぶ、と割れ目に触手が入り、
リセットは身を震わせる。

そのまま分泌液を塗りこみながら、
徐々に徐々に、
ケイブリスの触手の先端が
リセットの処女膜の中心、
処女孔とでもいうべき部分を
破らぬように広げていく。

「い、いたっ……はああっ、やめてっ」
「せっかくだからたまには丁寧に行ってやるよ、
試してみたいこともあったしな」



かなりの時間をかけて丁寧に慣らし、
ゆっくりと細くした生殖器の先端を、
リセットの敏感な腔内に差し込んだ。

「ああっ……!? な、なに……!?」

「なるほど、膜が破れないまま中に入れて
処女なわけか、おもしれーな……」

困惑するリセット。

痛みを伴わずに、最も敏感な粘膜に
生まれて初めての異物が侵入している。

その触手はソフトにリセットの
体内全ての快感を呼び覚ますようだった。

粘液の量を増やし、
ぎりぎりのところまで太くした触手で
リセットのキツイ入り口の締め付けを
堪能する。

「や、やだ、こんなの、
へ、変な感じだよう……」

「ぎやはは、気持ちいいか？俺様が
こんなに優しくしてやるなんて千年に1回あれば
多いほうだぞ？」

「う、うん、気持ちいい……」

「そ、そろそろイキそうだ、うおっ……」

「ふ、ふふふ、きつ、きつえっ」

腰をくねらせながらケイブリスとの交尾に応じる
リセット。

ありえないほどの快樂に心を熔かされ、
淫らな表情すら浮かべている。


「射精るっ……!!」

「はあっ、うん……♡」

魔獣の精液がリセットの腔内に
脈打ちながら打ち込まれた。

「はあ、はあ……っ、はあ……」
生まれて初めての快楽に、
リセットは平らかな胸を
はげしく上下させている。

ふと見るとクリスタルの色が
青く変わっていた。
処女膜をやぶらずとも
腔内に射精すると
「非処女」になるらしい。



本気というにはほど遠いが、
なかなか充実したセックスに、
ケイブリスは上機嫌だった。

ほどなくして、
部下の魔物から興味を引く報告があった。

今自分が遊び半分には戦っている
人間軍の総統。
そのなかで唯一気になる、
自分の圧倒的な力の前に臆せず
歯向かってきた、ある男。

その娘がさっきのカラーだというのだ。

牙が並んだ凶悪な口の奥で、
ぐふぐふとケイブリスは含み笑いをもらした。

「はーああ…本当にかわいいなあもう」

「ゆ、許して、ください…私もう…」

リセットのほぼ平らな胸のふくらみの先端の
ピンク色の蕾に、そして清楚な形だった性器の
左右の陰唇に、
ピアスやチェーンが飾り付けられている。
さながら
カラーの姫奴隷、といったところだ。

魔法の投影装置によって空中に巨大なスクリーンが作られ、そこから全世界へと凌辱と惨殺の光景は生放送される。

その「番組」で可憐な人間の女子を惨殺し、人間軍の士気を大幅に下げる……それが魔人メディウサの趣味だった。

これはその生放送の最中だ。

珍しい事に、メディウサとはいわば悪友のケイブリスまでもが参加している。

「どっちにしようかな〜と…」

あ、あんたは前がいいんだっけ？随分この子の締め付け気に入ってたもんね」

「おう、シメるのは俺が終わってからにしてくれよ」

「了解。さあて…多分遺言になると思うけれど、最後に何か言いたいことあるかなー？リセットちゃん」

メデイウサが笑いながら話しかける。

「お…」
凍えた子猫のように弱弱しく、リセットが口を開いた。

「おとーさん！これを見てるみなさん…！」

二柱の魔人はリセットの叫ぶような声に本気で驚いた。
こんな追い詰められていながら必死で大切な人に呼びかけている。

「わ、私はこれから死んじやいますけど…、
おとーさんがいればきっと平気です、
必ず勝つてくれます！」

「だから…頑張って、
戦ってください…!!
わ、わたしみたいに死ぬ子が
少なくて済むように……」

健気で、かつ心の強さ

を感じさせるリセットの遺言。

最後は涙声で言葉にならなかつた。

メダイウサがそれを

とても楽しげに聞いている。

邪悪な笑みを浮かべながら。

「かわいいリセットちゃんにはとびきりイイ感じの死に方を考えてあげないとね〜」

ずぶり……!!

「い、いや、

いぎやあああああつ!!!」

巨大なヘビの頭が、リセットの後ろの穴に一気に挿入される。「ぐ、うくうっ、あが、んあああああつ!!!」

「ほーら暴れるとどんどん入っていっちゃうよ〜」

「俺も入れさせてもらうぜつと……!」
前の穴にはケイブリスの触手が入り込んだ。

見るも無惨な凌辱が、開始された。
大陰唇につけられたピアスが、しやらしやらと鳴った。

魔法による各地の投影映像を見ている殆どの者があまりの激しい凌辱に戦慄している。

メデイウサの股間から伸びるへびは意思あるもののごとく動き、小さな彼女の体内で激しく暴れまわる。

そのたびに股間につけられたピアスが鈴のように鳴り、乳首のそれがメデイウサの爪で引っ張られる。

「ぎゃ、ぎゃああっ……た、たすけてえ、だれかああっ!!」
ケイブリスの触手までもが、可憐な小さい乙女に突っ込まれ、体内を蹂躪している。

「お、おお……いつはやっぱり最高っ……だあっ……!」

「う、うううう……うあああっ!!」

「あ、そろそろ壊れイキしそうだね、この子」
「なんだあそりやあ…?」

「苦しすぎてのーみそが壊れてきちゃって、
死ぬちよつとまえにすっごい感じまくって
イキまくっちゃうのよ。あんなに立派な子が
ブタみみたいに泣き叫んでよがるのは
面白いわよー」

「がははは、そりや面白そうだ！オラッ！イケッ！リセット！
イッちまえよ!!」

「ぎや……ぎやああああーっ!!!!」

ぼこん、と腹が膨れ上がり、
自目を向いて絶叫する。
メデイウサがヘビを一気に
リセットにねじ込んだからだ。

通常ではありえないような動きで
体がのた打ち回って痙攣し、
泡を吹きながら背骨が折れんばかりにのけぞる。

その強烈すぎる締め付けに
ケイブリスも射精を抑えることができなくなる。

「す、凄え……い、イクぞ、リセットおおっ……!」

「うおおおっ……!!! 射精るうっっ!!!」

泣き叫ぶような悲鳴じみた咆哮とともに、リセットの子宮内にケイブリスが精液を撃ち込んだ。

苦痛も圧迫感も、拡張される不快感も、
快樂となって彼女の脳を焼き尽くした。
全てが





射精の滝が止まるころ、リセットはもう
自分がほとんど呼吸をしていないことに気が付いた。

脳裏をよぎるのは優しい母、強くて元気な父。

最後に彼らに抱きしめてもらえないことだけが、
ちよっとだけ残念だった。

メデイウサは昼寝しに自分の部屋に帰り、
ケイブリスとリセットだけが拷問部屋に残された。

「お…おとーさん、おかーさん…」

たっぷり射精したケイブリスの耳に、
こと切れる寸前のリセットの小さい小さい断末魔が
かすかに聞こえる。

「……」

可憐な横顔は夢見るように微笑んでいて、
犯しつくされた苦痛の跡はみられない。

ケイブリスの胸に


どんな女を犯したときにも感じなかった、
トゲのようなものが刺さる。



哀れみだ。

ケイブリスは自分の爪で己が肉を軽く割くと、リセットの口に滲み出る血を含ませてやった。

強い生命力を持つ使徒として生まれ変わり、持ち直すもよし。たとえそのまま死んだとしても、苦痛は今ほどは感じないはずだ。



リセットを残し、ケイブリスは巨体を翻して
戦いのことに気持ちを切り替えた。

映像を最後まで見たであろう、この娘の父親、
自分が好敵手として認めた人間は
今頃目もくらむほどの憎悪に取り付かれているだろう。

怒りの力は侮れないものではあるが、
それが強すぎて何も見えない状態に陥ると
側面がもろくなり、隙だらけになってしまうものだ。

慎重に、かつ残忍に。この凌辱も必要な策の一つ。

最強の魔人は、来たるべき

決戦に向けて気を昂ぶらせていた。